

平成 21 年 6 月 3 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520412
 研究課題名 (和文) 自律学習を基盤とした個別対応型日本語授業の基礎的研究および
 実践モデルの構築
 研究課題名 (英文) Japanese as a Second Language Classes Based on Learner Autonomy and
 Learners' Individual Needs: Developing a Pedagogical Model
 研究代表者
 齋藤 伸子 (SAITO NOBUKO)
 桜美林大学・言語学系・准教授
 研究者番号：90337890

研究成果の概要：私立中規模大学における「自律学習を基盤とした個別対応型日本語授業」の実践を分析・考察することをおして、「意識する→計画する（学習目標を決める→学習計画を立てる→評価方法を決める）→実行する→振り返る」という実践の流れがモデル化された。また、研究期間に行われた実践者グループによる振り返りや議論の成果として、「柔軟な意識をもった教師」の存在という要素の重要性も今後の検討課題として浮かび上がってきた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育 自律 自律学習 個別対応 実践

1. 研究開始当初の背景

自律学習 (autonomous learning) とは、学習者が自分で自分の学習の責任を持つことである。学習方法も評価も、基本的には学習者自身が自覚をもって行うことになる。

言語教育における自律学習に関連した先行研究には、Dickinson (1987)、Holec (1988)、Wenden (1991)、Gardner and Miller (1994)、Dam (1995)、Little (1995)、Dickinson (1996)、Little and Dam (1998)、Little (1999)、Benson (2001) 他がある。これらの研究は、自律学習の理念を深く追及しているが、日本語教育分野における実践に基づくものではない。

一方、国内日本語教育界における自律学習への関心は 1990 年代に始まり、21 世紀初頭に着実な底流となっている。いわゆる「学習の多様化」への対応が、「専門別日本語教育」「学習者ニーズに応える教育」から、個々の学習者による学習ストラテジーの違いに移り、学習者オートノミー (learner autonomy) へと変わってきている (青木 2001)。1960 年代に始まった欧米での、イヴァン・イリッチやパウロ・フレイレなどの教育理論への傾倒が、1990 年代以後の日本国内で教育観として確固たる地位を得、自律学習の流れへとつながったともいえよう。次に求められるのは、自律への条件整備である。Benson (2001) の分

類にそって挙げれば、リソースセンター、CALL、インターネットなどの学習用機器、学習者育成、教室内学習管理やカリキュラム作成への学習者参加、教師教育といった様々なアプローチがある。これらの具体的施策のためにも、日本語教育の実践に基づく自律学習研究が求められている。

研究代表者らの所属する大学（私立中規模校）では、2003年度から、留学生を対象とした日本語授業において、「自律学習を基盤とする個別対応型日本語授業」（以下、実践機関での名称にならない「チュートリアル」と呼ぶ）を実施してきた。チュートリアルは、初級から上級までの、学部所属の学部留学生と短期の交換留学生を対象とし、10数名の教師のかかわる週1コマの必修授業としてはじめられた。

2005年度までの実践を通し、学習者個人のニーズを満たすこと、個人の学習管理能力を育成することによって、学習者の動機が高まったように思われた。しかし、このような評価は多分に感覚的なものであって、科学的に立証できるものではない。よって、実践に関し妥当性のある評価を行うことが必要だと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の点にある。

- (1) チュートリアルの実践をさまざまな角度から検討し、他機関でも運用可能な実践のためのモデルを構築すること。
- (2) 2003年度より継続してきたプログラムの実践内容および実践プロセスの記録を整理し、現状と問題点を洗い出すこと。
- (3) 理論的研究により、自律学習プログラムの有効な検証方法を見出すこと。

3. 研究の方法

言語教育分野における自律学習に関わる研究は、従来その多くが、欧米主導の応用言語学理論を基盤としたモデルを特定の授業に適用してデータをとり、それを検証するという方法をとってきた。これに対し本研究は、スタート地点を現実の授業実践に置き、そこで現れた事柄や問題点を分析することによって実践モデルを構築しようとするものである。これは、実践の中で生じた諸問題を実践者自身が検討し、理論的に分析し、得られた結果を再び現場に戻して再度実践するプロセスを繰り返すことによって可能となる。

本研究では、実践を行う教師自身が研究を行うことにより、実践と研究とが同時進行するため、教師自身も研究を通して成長する。その結果、研究プロセスが実践の改善に貢献し、よりよい実践が可能となる。このサイクルを図示すると、以下のようになる。



図 研究の流れ

具体的には、以下のことを行った。

- (1) 先行研究、先行実践例の調査、検討
- (2) 先行実践例の調査と情報の整理
- (3) 桜美林大学における2003～2008年度の実践結果のまとめ
- (4) 研究会の開催
- (5) 先行研究、先行実践例の調査結果を踏まえたプロジェクト研究の実施
- (6) 授業の記録
授業内容をDVDビデオに録画、またはICレコーダーに録音
- (7) プログラムに対する評価

4. 研究成果

本科研は、「自律学習」を基盤とする個別対応型日本語授業（以下、実施機関での名称にならない「チュートリアル」と呼ぶ）について、実践をもとにさまざまな角度から検討し、実践モデルを構築することを目的としたものである。

自律学習についてはさまざまな研究が行われているが、その多くが理論をもとにした研究であり、真に実践をもとにした研究は少ない。本研究においては、研究に関わる者がそれぞれの教育実践の場で自律学習を常に念頭において、自分の実践を振り返り、データ化し、それを分析するという方法を中心としている。また、当研究は、組織をあげての6年間（2008年度末現在）にわたる大規模な実践を基盤としており、多様な属性と多様な学習背景、日本語レベルの学生が対象であることから、実践を基にしたアプローチを多角的に行いつつ研究を進めることができる。

以下、年度順に成果をまとめる。

(1) 2006年度

① 先行研究・事例の調査

初年度であるため、先行研究と実践例を調査し、研究の基礎を作ることに力を注いだ。自律学習の基本理念について文献から先行研究を調査した。また、実践例として、国内外の学会において自律学習に関連する発表を行った研究者、実践者へのインタビュー調査を行い、結果をまとめた。

② プロジェクト研究の実施

チュートリアルの実践に関わる本学教員（研究協力者）より実践者の視点による研究テーマを募集し、それぞれのテーマによる小規模な研究を科研のプロジェクトとして発足させた。研究テーマは以下のとおりである。なお、プロジェクト研究は本科研の期間内実

施され、その成果は紀要、学会誌等に発表されるとともに、後掲の Web サイトにも採録されている。

- ・チュートリアルに関するイメージの PAC 分析
- ・日本語の自律学習を支援する PC 環境に関する調査研究
- ・チュートリアル授業における教師の役割

③実践の記録とその分析

チュートリアルの2つの授業を1年間録音、録画した。データからは、学期をとおして学習者に接することにより、学習スタイルや精神的な状況を把握し、タイミングを見計らってアドバイスをする教師行動が見られた。

④講演会の実施

自律学習に関する研究者、トムソン木下千尋氏 (The University of New South Wales, Australia) を招いての講演会と自律を目指す教室活動のデザインのワークショップを行った。後援会には本学日本語プログラムの教員が参加し、プログラムとしての方針である「自律」についての認識を深めることができた。

⑤研究会の実施

情報交換、意見交換を目的として、「学習者の自律を重んじた日本語活動・実践研究会」という名称の研究会を2回実施した。いずれも学内外から30名前後の参加者を得、活発な意見交換の機会とすることができた。第1回目「学習者の自律を重んじた日本語活動・実践研究会」2006年9月1日、於桜美林大学

- ・学内外の実践者による自律学習を基盤として実践の報告と意見交換
- ・ワークショップ「こんなとき、あなたならどうする？」

第2回目「学習者の自律を重んじた日本語活動・実践研究会—自律学習を疑う」2007年3月7日、於桜美林大学

- ・自律学習に関連したテーマの研究者によるクリティカルな発題と、それを踏まえたディスカッション

(2)2007年度

①プロジェクト研究の実施

先年度に引き続き、研究協力者による研究プロジェクトが発足した。研究テーマは以下のとおりである。

- ・学習支援者としての教師の意識の変化
- ・自律学習を目指す授業に対する学習者の態度—学習者は変わったのか—
- ・自律的な学習を目指した教室授業における自己評価シートの役割
- ・教室内と教室外活動を繋げる試み—個人プロジェクトを通して—

これらの研究は実践内容の問題点の洗い

出しにもつながり、実践内容の具体的な改善に結びつけることができた。

②研究会の実施

前年度の2回に続き、第3回目、第4回目の研究会を行った。

第3回目「学習者の自律を重んじた日本語活動

- ・実践研究会—チュートリアルをとおして「学習者の自律」を考える」2007年12月15日、於桜美林大学

・桜美林大学におけるチュートリアルの実践者らによる、学習者の自律を目指す授業実践に関するディスカッション

第4回目「学習者の自律を重んじた日本語活動

- ・実践研究会—自律を目指す学習によって何が変わったか/変わるか—学習者・教師・学習活動—」2008年3月、於桜美林大学
- ・学外講師による講演「自律外国語学習を考える—一定義・分類・構成要素」により理論的枠組みを学んだ

・実践をとおして学習者および教師は変わったのか、というテーマにそった研究発表および実践報告を行い、学内外の参加者とディスカッションを行った。

以上の調査結果および、考察、ディスカッションから得られた結果は、検討して、自律学習実践プログラムの汎用的なモデルの構築に向けて整理していく予定である。

③2003～2006年度の実践結果のまとめ

2003年度から2006年度までの実践内容をまとめ、書籍として出版した。(研究代表者、連携研究者、研究協力者、他の執筆による)。書籍名：『自律を目指すことばの学習—さくら先生のチュートリアル』2007年 凡人社 著者名：桜美林大学日本語プログラムグループさくら

(3)2008年度

①2003～2008年度の実践のまとめ

自律学習を基盤とした個別対応型授業がはじまった2003年度から2008年度までの実践の内容や資料、実践にかかわる会議の議事録を時系列に並べ、年表形式にまとめた。これにより、時系列に情報を俯瞰することができ、新たな視点からの分析が可能になった。後掲の研究会で年表をもとにディスカッションを行ったほか、年表の分析をもとにした研究成果を学会等で発表した。

②教師へのインタビュー調査の実施

当授業にかかわる教師のほぼ全員を対象に、インタビュー調査を行い、結果を分析した。自律学習を基盤とした個別対応型授業の実践から生じてきたと思われる、自律学習を基盤としたさまざまな形の実践について、実践者自身が分析して結果をまとめた。

③学内勉強会の開催

学内の研究協力者および実践にかかわる教員による研究会を3回実施し、本実践における自律学習の定義を実践者自身が見直し、共有する試みを行った。

④研究会の開催

学内外の研究者を対象とした公開研究会を1回開催した。2006年度から引き続き5回目となる。

第5回目「学習者の自律を重んじた日本語活動

・実践研究会—チュートリアルから自律へ—6年間の実践から考える—」2009年3月、於桜美林大学

・桜美林大学におけるチュートリアルの実践をまとめた年表と研究発表であげられた問題点をもとに、参加者とディスカッションを行った。

・平成15年度から現在までの実践記録の年表をポスターとして発表し、これをもとにポスターセッションを行って参加者とディスカッションを行った。

・「自律・自律学習・自律的な学習」という3つのカテゴリーに分けて、実践を分析した。

⑤これまでに得られた調査結果、研究成果、実践内容をまとめて、本実践の所属するプログラムのウェブサイト上に順次公開した。

(4)総括、成果のまとめ

研究をとおし、「自律学習を基盤とした個別対応型日本語授業の実践モデル」の一部として、以下の活動の流れが得られた。それぞれの段階で使用するマテリアル(シート)も標準化された。

<活動の流れ>

I意識する

現在の自分の状況を認識し、自分が求めていることを意識する

○目的

- ・自分が求めていることをはっきりさせる
- ・現在の自分の状況を知る
- ・自分に求められていることをつかむ
- ・現在の日本語力を把握する

○学習者がすること

- ・自分が求めていることをはっきり意識する
- ・自分の日本語力と将来の目標をイメージする
- ・現在の自分の状況を認識する

○教師がすること

- ・チュートリアル目的と全体の流れを話して確認する
- ・日本語で今どんなことが勉強したいか、自由に出してみるように呼びかける
- ・できれば、教師は学習者一人ひとりに個別に話しかけて手助けする
- ・出てきたニーズを学習者プロフィールに書きこむ

II計画する

実践する内容を具体的に決める

II-1学習目標を決める

II-2学習計画を立てる

II-3評価方法を決める

○目的

- ・自分の責任で学習を行うという気持を持つ
- ・目標を達成するためには学習をしなくてはならないことを知る
- ・自分に合った方法について考える

○学習者がすること

II-1学習目標を決める

- ・チュートリアルの時間での勉強を通して今学期に達成したい学習目標を決める
- ・設定した内容を確認し、内容確認のサインをする

II-2学習計画を立てる

- ・学習方法を考え、それに使うリソースを決める
- ・リソースの使い方を考える
- ・時間配分を決め、スケジュールを考える

II-3評価方法を決める

- ・評価する項目を決める
- ・評価者、評価内容、評価割合を決める
- ・ここまで決めた内容を見直して確認する

○教師がすること

II-1学習目標を決める

- ・学習者が適切な考え方ができるように、個別に話し合っただバイスする
- ・設定した内容を確認して、内容確認のサインをする

II-2学習計画を立てる

- ・学習者の目的や日本語力にあった学習方法と学習スケジュールが決められるように、教師の専門性を活かしたアドバイスをを行う

II-3評価方法を決める

- ・自己評価の考え方について学習者の理解が進むように説明する
- ・ここまで決めた内容を見直して確認する

III実行する

自分の学習を管理しながら、実際に学習を進める

○目的

- ・いろいろな学習方法を試し、自分の学習スタイルを知る
- ・学習を実践しながら、自分で自分の学習を管理する能力を身につける
- ・弱点やさらに伸ばしたい点を、集中的に学習して、日本語力の強化を図る

○学習者がすること

- ・学習計画に沿って学習を進める
- ・学習内容、感想を記録する
- ・学習の記録や成果物を個別にファイルする
- ・教師と個別セッションを持つ

○教師がすること

- ・教室内で、学習者からの日本語に関する質問に答えたり、必要に応じてアドバイスを与えたりする
- ・定期的に、学習者と個別セッションを行う
- ・授業のあとで、学習記録にコメントを書き込んで学習者が読めるようにする
- ・授業のあとで、教師用学習記録に学習者の所見を記入する

IV振り返る

学習全体を振り返り、自己評価する

○目的

- ・自己の学習を自己評価することで自律学習の力を高める
- ・学習の達成度を評価することで、学習の達成感を得て、今後の学習に活かす

○学習者がすること

- ・学習の記録や成果物をもとに今までの学習を振り返る
- ・評価を数値化する
- ・評価理由をはっきりさせ、教師に説明する

○教師がすること

- ・自己評価の考え方を再度学習者に伝え、評価シートに学習者が記入するための手助けをする
- ・評価シートに記入した内容について、学習者からの説明を聞き、不十分な点について再考できるようアドバイスする

(同内容のモデルは、桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」2007にも掲載した)

研究をとおして、上記のようにチュートリアルの流れがモデル化された一方で、新たな考え方も生じてきた。2008年度に実施した教師を対象にしたインタビューからは、教師の「自律学習」に対する意識が変化していることがわかった。

上記のモデルでは、「学習者が自分で決める」ことが重視され、自律学習を基盤とした授業は教師主導の一斉授業と対立するものと位置付けられている。しかし現在、教師は、たとえば一斉授業の中で教師主導のタスクをするとき、タスクの意味を学習者が自分自身のニーズと結びつけることも「自律」であると考え。また、学習者が自分の日本語の弱点を知り、教師が決めた授業の中でそれが補完できていることを意識することも、「自律」への第一歩であると考え。個別対応型のチュートリアルにおいても、個別性、自律性を伸ばす方法はひとつではなく、目の前の学習者に合わせて様々に変えることが教師のノウハウだと考えるようになってきた。

このような考え方をもとにすると、「モデル」はひとつの固定化されたものではなく、可変性と柔軟性を持ったものでなくてはな

らないことになる。そのモデルは、「自律学習」という基本方針を押さえつつ、実践の形を学習者と環境に合わせて自在にデザインすることのできる、教師あるいは教師集団の中にあるのではないだろうか。

本研究で目指した固定化されたモデルとは異なり、可変性を備えた教師あるいは教師集団の存在が、自律学習を基盤とした言語教育プログラムにおけるもうひとつのモデルとなるのではないか。これが本研究のもうひとつの結論であり、今後につながる研究課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

① 齋藤伸子、鈴木理子、自律を促す日本語学習—プログラムの「実践年表」から見える支援のあり方—、日本語教育方法研究会誌、Vol. 16、No. 1、2009、32-33、査読無

② 藤田ラウンド幸世、学習者オートノミーにおける「学習の見えないプロセス」—チュートリアル担当教員の物語と学習者の振り返りから、Obirin Today、9、2009、145-163、査読無

③ 齋藤伸子、大学生の日本語力を上げるには—日本語プログラムの実践—、Obirin Today、8、2008、43-57、査読無

④ 松下達彦 (共著)ほか6名、教育センター群の教育実践を考える—これまでとこれから— (2006年度教育センター群公開研究会)、Obirin Today、7、2007、177-209、査読無

⑤ 安藤節子、日本語教育専攻における実習の役割と可能性—基礎調査と現行の見直し—、『桜美林言語教育論叢』、第3号、2007、101-113、査読有

⑥ 堀口純子、映像メディア情報の共有者間で交わされた電子メールによる自己紹介、『第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム』、2007、36-41、査読有

⑦ 加藤早苗、松下達彦、ラウンドテーブルA「プログラムの設計・評価・改善の取り組み—組織・社会の視点から—」企画の趣旨、『2006年度実践研究フォーラム予稿集』2006、16、査読有

[学会発表] (計5件)

① 齋藤伸子、鈴木理子、自律を促す日本語学習—プログラムの「実践年表」から見える支援のあり方—、第32回日本語教育方法研究会、2009年3月21日、神奈川大学

② 齋藤伸子、学習者の自律を目指す学習活動—『モンゴルの風』を使って教材を作る、オーストリア日本語教師会2009年春研究会、

2009年2月28日、ウィーン大学（オーストリア）

③ 佐々木倫子、自律性と協働性を育てる日本語授業－背景と今後の展開、第19回全ブラジル日本語・日本文学・日本文化教師学会、2008年8月29日、リオデジャネイロ連邦大学（ブラジル）

④ 齋藤伸子、自律学習の考え方を生かした授業－チュートリアルの可能性－、シンポジウム「日本語教育の今後の連携に向けて」、2007年9月9日、モンゴル日本センター（モンゴル）

⑤ 林さと子、浜田麻里、文野峯子、齋藤伸子、春原憲一郎、個の中の多様性－学習者の多様性を捉える4つのアプローチ、2006年日本語教育国際研究大会、2006年8月6日、コロンビア大学（アメリカ合衆国）

〔図書〕（計4件）

① 藤田ラウンド幸世、Kluwer、Language policy and political issues in education、Sephen May and Nancy H. Hornberger (eds.)、Volume 1、2008、459 ページ、うち11 ページ（事典一章執筆）

② 齋藤伸子、松下達彦、佐々木倫子、藤田ラウンド幸世、他8名、（著者名：桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」）、凡人社、『自律を目指すことばの学習－さくら先生のチュートリアル－』2007、246 ページ、うち24-77、146-169、174-185、186-193、他共同執筆部分有

③ 佐々木倫子、明治書院、『日本語学研究事典』「日本語行動論」「話すこと」「対話」（事典項目執筆）、2007、1382 ページ、うち5 ページ

④ 佐々木倫子（編著）ほか9名、くろしお出版、『変貌する言語教育』、2007、258 ページ、うち47-54 ページ他

〔その他〕

研究の成果を公開した Web ページの URL
http://www7.obirin.ac.jp/nihongo/program/ja_autonomy.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 伸子 (SAITO NOBUKO)
桜美林大学・言語学系・准教授

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

佐々木 倫子 (SASAKI MICHIKO)
桜美林大学・言語学系・教授
研究者番号：80178665
松下 達彦 (MATSUSHITA TATSUHIKO)

桜美林大学・言語教育研究所・客員研究員
研究者番号：00255259

宮副ウォン 裕子 (MIYAZOE WON YUKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：90424093

安藤 節子 (ANDO SETSUKO)

桜美林大学・言語学系・准教授

研究者番号：40383533

藤田ラウンド 幸世 (FUJITA ROUND SACHIYO)

桜美林大学・言語教育研究所・準研究員

研究者番号：60383535

堀口 純子 (HORIGUCHI SUMIKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：00052283